【優秀賞】

人権との関わり

善通寺市立東中学校　二年　河鍋莉乃

私は人権について知っていることは多くない。でも、人権について考えるきっかけとなった活動がある。それは、小学五年生の総合的な学習の時間。目・耳・体に不自由がある人について調べて分かったことを「ポスターセッション」という形で発表する活動を行った。そのときに私は、耳に不自由がある人について調べた。私の同級生には、耳に不自由がある子がいた。また、その子と同じグループだった。私のグループには、実際に調べるテーマと関わりのある人がグループにいるということでその子から話を聞いて分かったことや知ったことをまとめて発表することになった。

その子から話を聞いて分かったことは、その子の中で自分なりに普段の生活のなかで頑張っていることがあるということ。その障害が生活に支障がでないように支えてくれている機械や先生がいたことの２つ。

その子なりに特に頑張っていることは、周りについていけるようにすることだった。一回で聞きとることができなかったときは、勇気を出してもう一度言ってもらえるように言ったこと。周りとなじめるように積極的に話かけていたこと。そんなことを私は、話を聞いたときに初めて知った。私は、もう一度言ってもらえるようにその子が頼んでいたときに、「一発で聞き取ってほしいな。」「なんのために機械を耳につけているのかな。」などと思っていなかっただろうか。その子の努力を何も知らない私が勝手に無視していなかっただろうか。とっさに自分の行動を振り返っていた。振り返れば振り返るほど、自分に当てはまっていく行動が山のようにあった。無意識のうちに、その子の思

いや考えを否定し続け、傷付けてしまっていたんだなと思い、申し訳ないという気持ちでいっぱいになった。

また、その子の話を聞いていると自分なりに頑張っているその子のことを支えてくれている機械や先生の存在も知った。その子の両耳には、「人工内耳」という機械。しゃべっている先生の声を聞こえやすくするマイク。また、そのマイクを何も言わずに快くマイクをつけて話をする先生。話をしている先生の内容をわかりやすくもう一度隣にしゃがんで説明する付き添いの先生。私は、そんな機械や先生方のことをどう思っていたのだろうか。考えたことのなかったためか、分からなかった。支えてくれているものや寄り添ってくれている先生の思いや考えを知るのもいい機会だと感じた。

私は、この活動を通して人権というものに初めて触れた。その人の思いや考えを否定し一方的に押し付ける親切は、思いやりでもなんでもない。できないことがある人たちにもその人たちなりの考え方ややり方があるのにその人のことを何も理解しようとせず、てきとうに寄り添うことは、人権を尊重することができていないと思う。誰しもみんな、人権を尊重される権利がある。だけど、家庭内環境、できること、できないことなど全てのことが同じとは限らない。だから、その人に合った接し方を見つけて、接することが大切だと思う。

前の私は、人権とは、その人がしてもらってうれしいと思うことをすることだと思っていた。その人のことを気遣って、大変そうだったら、手伝うことが人としての思いやりだと思っていた。だけど今は、その人にとって一番である対応を行うことが人権の尊重につながると思っている。例えば、車いすを使用している人が高い棚の上の方の本を取ろうとしている場合。周りの人から見ると、本を取ってあげるのが良いのかもしれない。でも、その人は、自分で取れるようになりたいと思って自力で頑張っているかもしれない。このように、さまざま

な視点から見てその人にとって一番の対応をすることが大切だと思う。

人権を尊重するということは、最初は難しいと感じるかもしれない。だけど、その人のことを大切に思い、その人について真剣に考えて、その人と向き合おうということをしている時点で人権を尊重していると思う。